

《研究ノート》

## 「漢字アートコミュニケーション」による 新しい「学び」の構築へ向けて

諏訪 兼久 (現代教育研究所研究員)

松本 淳 (現代教育研究所所員 初等教育学科)

須永 哲矢 (日本語日本文学科)

### 1. はじめに

今は時代の変革期と言われている。AI (artificial intelligence : 人工知能) の発展により、2035年にはAI・ロボットが人間の多くの仕事を行う時代になり、仕事や医療においては遠隔で従事できる時代になると言われている。

現在とは全く違った時代・社会を迎える現代の若者は、どのような力を育む必要があるのだろうか。

2020年の教育改革において文部科学省は、学習指導要領に「思考力・判断力・表現力を重視する」と記載した。これまでの「(知識を) 覚えること」から、「(知識を) どう使うか」への教育の転換が求められている。

このような流れの中で、これからの時代を生きる若者が「想像力」「洞察力」「自己表現力」等を育むことを目指して、2017年11月より漢字アートコミュニケーションを使った「漢字の小セミナー」を年に数回実施してきた。

本稿では、第1回から第5回までの「漢字の小セミナー」を振り返り、そこでテーマとした「漢字を通して、今何をしたらいいかを発見する」にどのようにアプローチしていったのかを紹介し、その中から参加学生が自己認識・自己理解へ向けて何を見出していったのかを検証する。

### 2. 「漢字アートコミュニケーション」とは

「漢字一文字」を通して、学生が具体的に「メタ認知」を体感していく新しい教育メソッドを創ることを目指してアートコミュニケーションの手法を応用した「漢字の小セミナー」を実施した。アートコミュニケーションとは、絵画を鑑賞して対話をする方法で、「見る、考える、話す、聞く」を通して新たな発見を導く手法である。絵画を漢字に変えたのが、「漢字アートコミュニケーション」である。

#### 「漢字アートコミュニケーション」の実施要領

以下の要領で「漢字アートコミュニケーション」を実施した。

対象：昭和女子大学の学生

実施日と参加人数

第1回：2017年11月20日 (6名)

第2回：2017年12月28日 (4名)



「漢字アートコミュニケーション」による新しい「学び」の構築へ向けて

第3回：2018年3月7日（3名）

第4回：2018年5月29日（3名）

第5回：2018年7月3日（4名）

時間：一人あたりは20分程度

準備：受講者には事前に、「好きな漢字」「気になる漢字」一文字を考えてきてもらった。



手順：①講師の諏訪との1対1のフリー対話方式で行う。他の受講生は傍聴している。

②受講生は黒板に用意した漢字を板書する。

③他の学生は基本的に傍聴しているが、諏訪の誘いで1回考えを語る機会がある。

一人の受講生に対して、①～③を繰り返す。

対話の様子：漢字をスタート地点にして、受講生の思いを自由に話してもらう。「なぜこの漢字を選んだのか」から始まり、「この漢字が持つイメージ」などについて、学生には自分の考えや思いを語ってもらう。その話の内容と漢字の象形性との関連を見取って行く。そして受講生の思いを漢字の字形解釈をもとに言語化していく試みをする。

### 3. 「漢字アートコミュニケーション」セミナーの実施内容について

ここでは漢字を「話題」として、それをめぐって「対話」を行う、というアートコミュニケーションセミナーを実施した結果見えてきたことをまとめておく。

#### 3-1. 話題設定としての「漢字」

##### 3-1-1. 漢字の特徴—意味と象形性

コミュニケーション、セラピー等の場面では、絵を見て話題を展開させるなど、足場となる話題を設定するという手法が多く見受けられる。対話をするのが本筋で、足場の話題はその呼び水、という位置づけであれば、その話題は何でもよいように思われるが、そのなかで漢字を話題として設定した意義について、ここでは考えてみたい。

漢字は文字の中では表語文字（より一般的な用語法では表音文字に対する「表意文字」と考えてよい）に位置づけられ、その最大の特徴は、「音だけでなく意味も持っている」という点にある。アルファベットや仮名といった表音文字であれば、それはあくまで音を表す記号である。これに対し漢字の場合、さらに意味が加わる。例えばカタカナの「カ」の場合、これは目に見える通りの線の集合体（すなわち「絵」としての認識）、あるいは「ka」という「音」として認識されるが、これが漢字の「力」であればさらに「ちから」という意味、すなわち「語」として認識することも可能である。これら認識の多様性は、自由に思考する入口の多様性と直結するため、漢字を話題にすることは話の広がりにおいて有効であると考えた。

また、漢字はいわゆる絵からスタートしていることはよく知られている。そのため、文字を図形的に線の集合体として認識する場合、その連想がしやすい。絵を示し、そこから連想を膨らませるコ

コミュニケーション手法が一般的なアートコミュニケーションであるが、漢字を絵として認識するのであればこれと同様の効果は得られ、加えて上記のとおり意味を持った語として広げていくという可能性も広がる。さまざまな方向性を内包しつつ、1文字に集約されている線の集合体としての漢字は、コミュニケーションの出発点として、絵以上に端的かつ適切なのではないか。

以上のような可能性を感じ、漢字を話題設定としてのアートコミュニケーションを試みることにした。

### 3-1-2. 漢字に対する「解釈」の土壌

さらに日本の文化には、漢字に対し、後付け的に解釈を与えるという土壌が育っている。「人」という字は人と人が支えあっている姿」「辛」という字は「幸」から「一」が足りないだけ、あと一歩で幸せになれる」といった解釈は、それら漢字の実際の成り立ちから言えば事実と反する解釈である(図1、図2)。

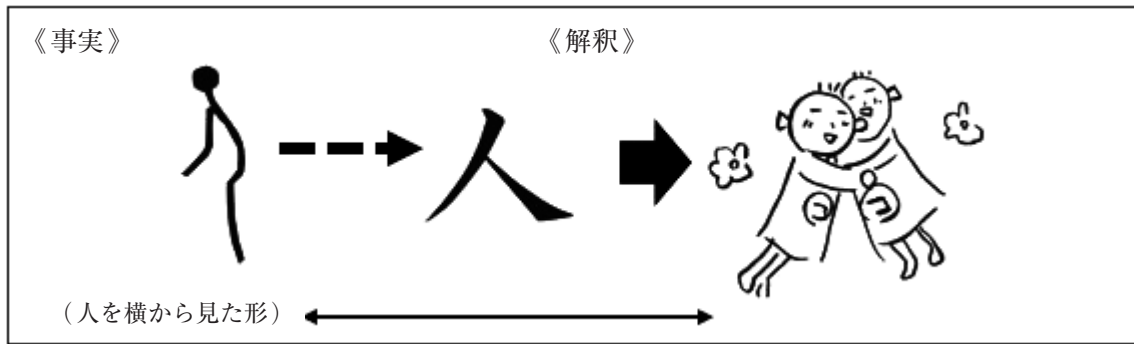


図1 「人」の字の由来と、解釈

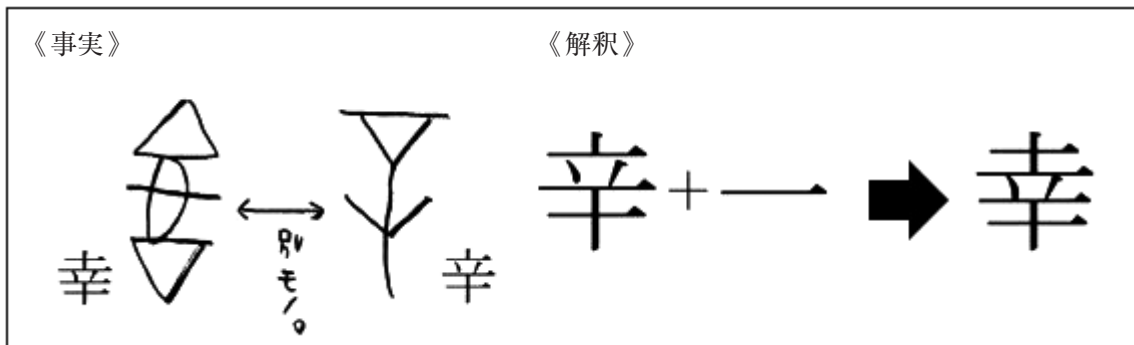


図2 「辛」に対する解釈

しかし日本人はこのような解釈を漢字に対して行うことで、その字が表す概念や事態(人間、辛いこと)に対し、前向きな認識を持てるように意識の変革を行ってきたと見ることもできる。ここにおいても、漢字をもとにした発想の多様性を確認することができる。「人」の字に対する解釈は図形的(実際に人と人が支えあっている絵が浮かぶ)であるのに対し、「辛」の字に対する解釈は図形ではなく、より細かい漢字に分解したうえで、その意味の組み合わせ(「辛」+「一」)となっており、これらは解釈の仕方がまったく異なる。漢字の成り立ちの話に戻れば、これは「象形」と「会意」の違いに位置づけられようが、事実として重要なことは、このように自由に意味づけするときにおいても、

絵としてみるか、意味としてみるかという幅が存在することである。

本アートコミュニケーションは、漢字の成り立ちについて正しい知識を得ることを目指すものではない。漢字一字を出発点に、自由に対話を広げていき、自己理解を深めることを目的としている。会話の出発点としての課題をどう考えるかにあたり、考え方においてはある程度なじみのあるものでありながら、方向性において多様性を持つという点において、漢字は他の課題では得られない効果を発揮するはずである。

### 3-2. 受講生側に観察できた傾向・類型

本アートコミュニケーションの特徴の一つとして、受講生側に漢字を自由に選んで持ってきてもらうという点が挙げられる。こちらが用意した絵を見せる、というような形式ではなく、受講生自身の心に浮かんだ漢字を出してもらうことによって、各自の考え方や内なる思いにたどり着きやすいのではないかと考えたためである。

上述のとおり、漢字には図形としての側面と、意味を持った語としての側面がある。非漢字圏の外国人は、「意味も読みもわからないけれど、この字の形がかっこいい」という理由で「好きな漢字」を選ぶこともあるが、今回受講した学生（日本人）の傾向を見ると、単なる図形として漢字を選んでくる、というケースはほとんど見られず、基本的に意味・音を持った文字として選ぶ、という出発点に立つようである。この時点で、選んだ文字に何らかの意味づけをしていると考えられる。その中でも、選び方には受講生によって傾向差が見られた。

ケース1) 「優」という字を選択。

理由は、「最近、優しくできていないなあ、と思っていたから」

ケース2) 「新」という字を選択。

理由は、「出身地が新潟だからなんとなく」

ケース1) では、「優」という漢字に対し、「やさしい」という意味を見出しており、「やさしい」という概念の象徴として「優」の字を選択していると言える。これに対し、ケース2) では「新」の字に紐づけられる意味は意識されておらず、出身地や自分の名前など、身近な文字列をきっかけに選択している。前者の選択意識は「語」としての認識に近く、後者は「単なる文字としての形」に近い、モノの名札、モノの名に含まれる部品としての認識といえよう。漢字の選び方には、当然、意識の持ちよりの差が反映されていると考えられるので、この後の対話においては、それぞれのタイプに合わせた展開がなされる（4-2 参照）。

## 4. 漢字をめぐる「対話」

ここからは、受講生が選んだ漢字をめぐる実際に対話を行う、アートコミュニケーションの実態について報告する。

#### 4-1. 対話を通して、自分の思いを掘り起こす

本アートコミュニケーションは、当初から明確なゴールを設定していたわけではなく、複数の要素を複合させた実験的な試みとして開始したものである。漢字をめぐって語ることで、(1) 日ごろ自分から語ることがあまりない学生でも、自分から語るようになる、(2) 「正解」のないことを考えさせることによる、「とらわれない思考」のトレーニングになる、(3) 自分で選んだ漢字について語っていく中で、自分自身でも自覚していなかった自分の思いに気づくことがある、などの成果を経験的に感じており、これを何らかのメソッドとして確立できないかという思いで開始したのが本プログラムであり、当初は方法から目指すものまでが模索状態であった。

1回目は漢字一文字を使って対話が成り立つかを確認し、2回目からは「漢字を通して、今何をしたらいいかを発見する」というテーマを掲げた。そのため、漢字をめぐって対話を開始しても、話がどこにたどりいついたら終了なのかもあえて定めずに、どのように話が展開できるか（または自然に展開するか）自体が実験内容であった。まずは受講生との対話を重ねながら効果を確認し、その繰り返しなかで方向性を定めていくことになったが、当初のひとまずのゴール地点としては、今思い返すと「自分の思いを掘り起こす」というところにやや重きを置いていたように思われる。

#### 4-2. 漢字アートコミュニケーション実践例

受講生に漢字を書いてもらい、対話を開始する。実際には20分前後のフリートークとなるが、ここでは前掲の二つのケースについて、対話の概要を紹介する。

##### ケース1) 「優」

なぜこの字を選んだのかを尋ねたところ、「最近優しくできていないと思ったから」との回答したことは先述したが、受講生が語への関心「やさしさ」とは、という問いをすでに持っていることがわかる。そこで、この漢字を通して「やさしさ」とは、と議題設定。「優」の右側中央部に「心」があることがまず注目され、その周りの形にどのような意味があるか、それらが受講生にとってはどう見えるかを掘り下げてゆく。「心」の下の「夕」が、心を支えているように見える、では上の部分は…と話を広げていき、それぞれの部品に自分なりの意味づけを行いながら自分にとっての「やさしい」とはどのようなものかについて答えを探してゆく。

##### ケース2) 「新」

なぜこの字を選んだのかを尋ねたところ、「出身地が新潟だから」と答えたことは先述した。特に「新」が持つ意味の「あたらしい」に関心があるわけではないケース。安易に決めてきた場合ともいえるが、それでも選んだには、選んだ意味があることを前提に取り組んでゆく（「新潟」のうち「潟」を選ぶ可能性もあるにもかかわらず、「新」を選んだことにはなにがしかの意味を見出したい）。対話開始の足場として形から入って、「新」の字を構成している部分の「木」に注目。「木」を見てどんな木を連想するかと発問し、連想を開始させる。「桜の木」と回答。なぜ桜なのかと尋ねてゆくと、これから予定している留学の話などにも自然に広がっていった。そのような一連の話の内容から「あたらしく」なるとは、という意味付けに繋げてゆく。受講生側のイメージが膨らむように対話を進めてゆく。

## 5. 受講生たちが感じたこと・得たこと

このようなアートコミュニケーションを用いた対話を通して、受講生たちが感じたこと・得たものは何かを、各回終了時に参加学生が提出した感想シートからみていく。

〈新鮮な体験だった〉

「漢字は覚えるもの！」的意識が強くあったので、このように漢字のもつメッセージを考えるのは新鮮で楽しかったです。 (選んだ漢字：【猫】) (第1回参加、日本語日本文学科4年)

〈「漢字」の奥深さ・面白さを感じた〉

無意識のうちに選んだ漢字に魅かれているところがあるのではないかと思います。漢字の奥深さや面白さに触れられるすばらしい授業を受けることができ、良かったです。

(選んだ漢字：【桜】) (第1回参加、日本語日本文学1年)

〈気持ちの整理が出来た〉

一文字の漢字から自分の人生観が変わったり、気持ちの整理がついたり、本当にすごいなと思いましたし、色んなことを考える良い機会になりました。また、意見をもとめられたときに、しっかり自分の意見を言えるようにするには自分の考えや気持ちを言語化できるようにすることで、相手にも伝えられるし、自分自身の気持ちの整理にもつながるのだなあとと思いました。

(選んだ漢字：【寧】) (第2回参加、健康デザイン学科3年)

〈「漢字」を通して自分自身と向き合った〉

今まで生きてきて、漢字の成り立ちをここまで考えたことは正直ありませんでした。だからこそ、今日のセミナーが考えさせられる内容ばかりで驚きの連続でした。「漢字」で自分自身のことなんて分からないであろう…とはじめは思っていたのですが、大間違いでした。自分自身の「将来」を考える上で大切なことを教えて頂けたと思っています。フルネームで「岡」という漢字をこれからも書いていきたいと思います。 (選んだ漢字：【岡】) (第2回参加、英語コミュニケーション学科3年)

〈「漢字」の個性、意味、内に秘めているものを感じた〉

二回目の参加だったのですが、心理的な面まで考えることができ、大変勉強になりました。やはり、一人一人選んだ漢字には、その人のなりたい理想像や願望が表れているのだと感じました。一つの漢字から、その人のことが分かり、今後どのようにしていけばいいのか、というところまで話が広がることに本当に深く驚き、感動しました。普段、何も感じずに書いている漢字ですが、一つ一つの漢字には個性や意味、内に秘められているものがあるのだと強く感じました。

(選んだ漢字：【君】) (第2回参加、日本語日本学科1年)

〈自分の“なりたいイメージ”がはっきりした〉

自分の中で無意識に考えていることが分かって、自分の“なりたいイメージ”がはっきりしました。ムーミンのキャラクターにスナフキンという男の子がいるのですが、その少年のセリフで「羅針盤なんて人間本来の感覚を鈍くするだけさ」というものがあります。私はこの意味を実感することがなかったのですが、今回のセミナーを受けて、自分が行きたい方向というのは既に自分の中にあるものなのだ、先生とお話することで気づきました。スナフキンの言葉の意味がやっと分かって良かったです。 (選んだ漢字：【優】) (第3回参加、日本語日本学科1年)

〈3つの漢字から感じること〉

3回目のセミナーということで、今までの漢字を並べて考えました。そうすると、やはり何か全て

つながっている部分があったり、3つの漢字全体から自分に向けられたパワーを感じました。

(選んだ漢字：【桜】)(第3回参加、日本語日本学科1年)

〈やさしさへの一步を見出した〉

本当の優しいとは何かについてちょうど悩んでいた時期だったので、会話するところから始まるという明確な目標ができたので、良かったです。また、多様性についてどうやって上手くつきあっていけば良いかを考える良い機会になりました。(選んだ漢字：【優】)(第5回参加、健康デザイン学科3年)

多くの学生は、漢字一文字から展開されるコミュニケーションの世界を新鮮な驚きと好奇心を持って受け止め、それを、自分自身を知る手がかりとしていった。また、「やさしさ」への最初の一步は「会話をする」ところから始めるのだと、具体的な行動計画(する)を見出していった学生もいた。さらに回数を重ねて漢字のセミナーに参加し、1回目、2回目、3回目と自分が持ってきた漢字をあらためて眺めてみて、それらの漢字を通して、見えてくるメッセージ性や意味を感じ取ろうとしていた学生も何名かいた。

2回目から5回目までは、「漢字の小セミナー」のテーマが「漢字を通して、今何をしたらいいかを発見する」だったので、学生が漢字を選ぶ時も、対話に臨むときも、「自分が何をしたいのか」「自分の願いは何か」「そのための第一着手点はどこか」等を意識していて、それらに対する答えやヒントを見出そうとしていたのだと思われる。

## 6. 今後の課題と展望

一文字の漢字をきっかけにフリートークに飛び立っていき話を広げ、話をまとめ、願いや発見を明らかにする流れを試みましたが、現状としては話が拡散してしまう傾向も強くあったことが課題として挙げられる。今後は、「漢字」の特性を生かして、漢字に還る、という流れも作っていきたい。また、この場で発見したものを最後にピン押しする工夫も必要であった。さらに、話が進んで、残りの漢字の部位の象形を見ていて、考えが詰まった場合に、他者視点をいれるような誘導があってもよかったと思う。

5回のセミナーを通して、「漢字アートコミュニケーション」の流れの基礎は確立できたと考える。「漢字」は既存概念を超え、自分自身の内にある感性を引き出し、自分は何を考えているのか、自分はどう見ているのかという「メタ認知」を促す可能性を持っていること分かった。今後は引き出すことができた創造力、思考力、表現力や感受性の断片をさらに発展させることが大事になると考える。そこで、対話の質の向上とメタ認知体験を導く方法を考えていきたい。

## 7. おわりに—新しい「学びの場」としての可能性

「漢字」を題材としたセミナーを通して、新しい「学びの場」の創造の可能性を感じた。まじめで緊張感のある場でありながら、硬くなく、学生が自由に意見を述べられる心を開いた場を設けることが出来た。授業でも、休み時間でも作れない場が創造された。

「学科・学年を超えて、友情を育む」という願いを持って、セミナーの企画・開催をしたら、学科・学年を超えて学生たちが参加し、交流が始まった。また、教員も学科を超えてこのセミナーの運営に協力してくれるようになった。企画・運営者が、「どういうセミナーの場にしたいか」の願いを

「漢字アートコミュニケーション」による新しい「学び」の構築へ向けて

明確にし、エネルギーを込めることの大切さを感じさせられた。

学生たちのモチベーションも高かった。第3回の「漢字の小セミナー」では、学生たちは春休みにもかかわらず、このセミナーのためだけに大学に来た。みんな漢字のセミナーを楽しみにしていた。学生たちのモチベーションに支えられた場となった。セミナー終了後に個人的な相談をしてくる学生もいて、学生との距離も近くなっていた。

試験もない。成績もつかない。単位にもならない。でも、学びになる。気づきがある。今、抱えている問題を解決するヒントになったり、その後の人生に役に立つ。そんな「学びの場」が、これからの時代には益々必要になってくるのではないだろうか。

そして、このような自由な場において行われるセミナーが、何が起こるかわからない未来を颯爽と生きていく人材の育成につながればと願う次第である。

---

## 参考文献

文部科学省 学習指導要領

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1383986.htm#section3](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm#section3)（検索日：2020年9月23日）

文部科学省 新学習指導要領について

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shisetu/044/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/09/1405957\\_003.pdf#search=%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81+2020%E5%AD%A6%E7%BF%92%E6%8C%87%E5%B0%8E%E8%A6%81%E9%A0%98](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2018/07/09/1405957_003.pdf#search=%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81+2020%E5%AD%A6%E7%BF%92%E6%8C%87%E5%B0%8E%E8%A6%81%E9%A0%98)（検索日：2020年9月23日）

フィリップ・ヤノウイン（2015）『どこからそう思う？学力をのばす美術鑑賞』淡交社

ゴルゴ松本（2015）『あっ！命の授業』廣済堂出版

イラスト：須永哲矢